

## 「コリント教会へのパウロの手紙」のポイント

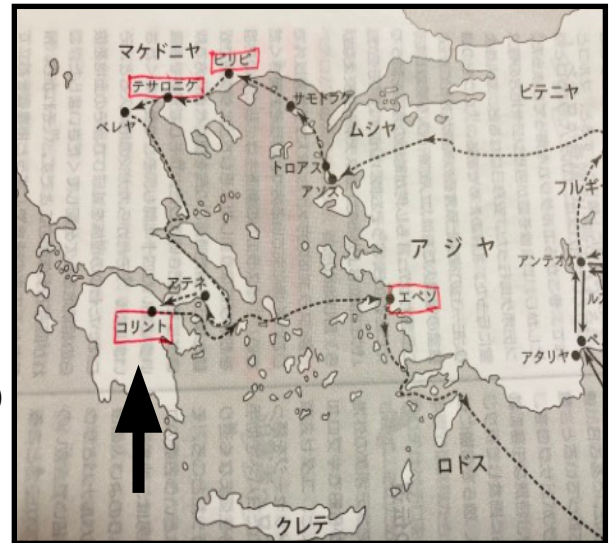
## 1 コリント教会への手紙のアウトライン

## A：教会の問題についての対処

- (1)教会の分裂について(1章10節～4章21節)
- (2)教会の無秩序な状態について(5章1節～6章20節)

## B：教会の質問に答える

- (1)クリスチヤンの結婚に関する教え(7章1節～40節)
- (2)クリスチヤンの自由に関する教え(8章1節～10章33節)
- (3)礼拝に関する教え(11章1節～14章40節)
- (4)復活に関する教え(15章1節～16章24節)



## 「コリント教会へのパウロの手紙」を読んでみよう

## 1 今日の聖書箇所：11章17節～34節

## 2 今日のポイント：聖餐式の本当の意味を表していたコリントの愛餐会

## (1)前回までの復習

パウロは11章の前半で礼拝に参加する時の服装や姿について言及しました。現代では、ちょっと奇妙に見える女性のかぶり物ですが、当時は多くの女性が頭に着用し礼拝に出るという慣習を持っていたものでした(現代のカトリックにもその傾向がある/当時は売春婦だけがかぶりものをしなかった)。福音とは直接関係はないものの、礼拝を行うにあたり不用意な思いを与えてしまう行為について、パウロは言及しました。創造主に向かうべき思いを、その他の事がかき乱してはならないというパウロの警告でした。パウロが警告を行うほど、当時のコリント教会の人々は礼拝以外のことに集中していたのかも知れません。

## (2)愛さんと聖餐(17～22節)

パウロは、17節でコリント教会が向き合うべきもう一つの問題について言及しました。それは「聖餐式と愛餐会」についてでした。11章前半で扱った礼拝の問題も、創造主が中心となる礼拝ではなく、自分達の姿が中心になっていた為に問題となりました。今回の聖餐式や愛餐会の問題も、創造主が中心となるのではなく、人間が事柄の中心になっていたゆえに問題が起きました。当時の聖餐式では、当時のユダヤ教が行っていた習わしに共に食事をする愛さん会が行われていました。しかし、この聖餐式を前にした愛さんで大きな問題が発生していたのです。

21節でその問題を指摘しています。21節「先に来た者はすでにそこで食事を済ませているが、後から来た者はまだ空腹のままにいる状態で、その為に争いが起こっている」と書かれています。先に来た者と後から来た者の間で争いがあったのです。先に来た者や後に来た者について、具体的が言及はありませんが、当時、教会の中で比較的経済的に余裕のある信者と、経済的余裕のない貧しい信者の間に大きな隔たりがあったようです。愛さんの場合も同じで、経済的に余裕のある信者は先に愛さん会

に参加し、お腹いっぱいにご飯を楽しみ、また酔うほどに飲んでいたようです。一方で、貧しい信者は一生懸命仕事をし、その足で愛さん会と聖餐式・礼拝に参加していた人々もいたようです。主の恵みを共に分かち合うはずの愛さんは、お金持ちの為の食事会へとなくなってしまっていたのです。貧富に関係なく主と共に思い、恵みを分かち合うはずの愛さん会の本来の姿はそこにありませんでした。

ゆえにパウロは22節で、食事の事で問題が起こるくらいなら、家で食事をしてもらうようにと説いています。

### (3)聖餐式の意味を考えよ(23～33節)

このように創造主を中心とした教会というよりは、人間の思いが中心となっていたコリント教会にもう一度、罪を悔い改めて、真摯な態度で臨むようにとパウロは語っています。教会の大切な礼典である聖餐式の意味をもう一度考える事を通して、キリスト中心の共同体になる事を願っていました。聖餐式では、キリストの裂かれた体を意味するパン、流された血潮を意味する葡萄杯を頂く事を通して、一人一人がキリストを覚え、キリストに倣う生き方をする為のものです。その為には、自らを深く顧みて、罪深い姿を悔い改めて、聖餐式に臨まなければなりません。しかし、残念ながら、コリント教会では、自らを顧みるどころか、弱者を顧みずに無視し、豊かな人達だけの愛さん会を行った後、何の反省も悔い改めをせずに聖餐式に参加していた姿がありました。その様子を30節でこのように語っています「あなたがたの中に弱い者や病人がたくさんいたり、また死んだ人が大勢いるのはその為である」。

キリストが中心となるはずのキリスト共同体(教会)で、人間が中心となるときに、このような悲劇が起こります。パウロはコリント教会の実情を表すことになった聖餐式や愛さん会への思いを改めることを通して、コリント教会がイエス様中心の教会になる事を願っていました。

## 3 分かち合ってみましょう

コリント教会でも、教会として大切な聖餐式が行われていました。しかし、パウロはその前に行われている愛さんの姿を見ながら、聖餐式が何の意味も持たなくなっているのを発見します。教会が大切にすべき聖礼典には洗礼と聖餐式がありますが、本来の意味を忘れて儀式化する時、それは信徒へ何の意味も持たなくなります。日本では聖餐式を厳かにやれば聖餐式に成功したかのように思われますが「厳かさ」は本来の意味ではありません。一人一人がキリストを覚え、キリストを中心とした生活に戻る決意をする時、聖餐式の本当の意味が見えてきます。

私たちが大切にしている礼拝も、キリスト中心に行われているか、自らもまず顧みなければなりません。